

## 第十五講 総括

春学期の授業では文化史学とは何であり、どのような方法によって研究されるのかを考えながら講義してきた。その為には記憶、歴史学、文化史学のそれぞれの特性と関連性について考察せざるを得なかった。本学における文化史学が 1948 年 4 月に石田一良教授の下で専攻として始まり、以来 65 年の歴史を誇ってきたことを還り見る必要がある。文化史学は決して近年の新文化史ブームの産物ではないことに心していただきたい。

文化史学を学問領域としてどのように位置付けていくのか、この点に関してこれまで真剣に議論されてきたのだろうかという疑問が生じてくる。歴史学のごく狭い領域しか扱っていないと見られてきたことは否定できない。政治史や社会経済史全盛時代には文化史は本質ではなく、歴史の副次的な領域でしかないという見方が一般的ではなかったか。それ故に歴史学界全体の中で文化史学が軽い存在として扱われてきたきらいがあった。そのような状況に変化が生じてきたのが文化人類学の発展と社会史の流行であった。文化人類学では文化は文芸や美術に限定されることはなく、いわば人間活動のすべてが文化としてとらえられる。また社会史との関連で言えば、社会史で取り上げられる心性と文化とはきわめて近い、或いは重なり合う関係にある。国民史を核としてきた従来の歴史学が前世紀末に壁に突き当たったとき、歴史研究者の目が文化史に注がれるようになったのである。

このような流れの変化が我々の周りを取り巻いていることは認めなければならないだろう。しかし、この授業で扱っている文化史学は決して歴史学の一領域としての文化史学ではない。歴史学とは近縁関係にあり、相互補完的な関係にはあるが歴史学からは自立している学問領域としての文化史学の在り様と可能性について考察してきたつもりである。授業で強調したのは歴史を文化の構造として見ていくということである。同じ経済条件を与えても、同じ資本主義経済が生まれてくるとは限らない。かつて大塚久雄が指摘したように、文化が違えば結果もまた違ってくるのである。倫理・慣習・価値観・制度・法規範などが文化行動の根底にあり、それに

規定される形で人々は行動する、そのような文化構造をこの授業では想定してきた。

またこの授業では記憶を文化史学の構成要素としてとらえるべきことを提唱してみた。曖昧で可変性に富む記憶をどのようにとらえ、扱っていくのか。この問題の考察を避けて、文化史研究は有り得ないだろうとも考えている。過去は「本来如何に在ったのか」は歴史学の重要な基礎であると同時に、文化史学にとっても大事な前提である。しかし文化史学において、過去は「どのように語られ、描かれてきたのか」、つまりどのように記憶されてきたのかも大事なことである。その過去を語り、描いているものは必ずしも文字テキストだけとは限らない。

文化史学においては文字テキストの排他的・特権的な位置は保障されている訳ではない。遺跡や遺物も重要なテキストであれば、口承されていく物語もテキストであり、絵画や彫刻、建物もテキストである。この授業では文化史学が扱うテキストについても議論した。

授業では何回かレポートを課してきた。小レポートの課題としては「人は過去を記憶し、記録することによって何を求めるのか」、「歴史学とは何か」、「史料は自ら歴史を語れるか」、「鎌倉時代はいつ始まったのか／ペロポネソス戦争は何年間続いたのか／百年戦争は何と何の争いか」、「歴史は実体か、それとも表象に過ぎないのか」、「近代は過去をどのように利用してきたのか」を課してきた。大レポートの課題としては「過去の記憶と歴史、そして国民国家の関係について考えなさい」と「文化史学とは何か？その特徴と可能性、そしてその限界性について考察しなさい」を問うている。

